

すすめよう

木材の地域循環

NPO法人青森バイオマスエネルギー推進協議会
株式会社今井産業
ウッドラック



NPPO法人 青森バイオマスエネルギー 推進協議会

「これを実現させます」

そう言って、NPPO法人青森バイオマスエネルギー推進協議会の高橋博志理事長が1枚の「絵」を見た。普及させようとするエネルギーは木質バイオマスのペレットで、ペレット製造プラントに原料となる木材を「自伐林業方式」で仕入れ、一般家

庭のペレットストーブや、福祉施設などのペレットボイラーの燃料として供給するフロー（流れ）が描かれている。

「これが目指す『エネルギー独立共和国』のしくみです。地域に必要なエネルギーを、地域で作り出して供給するシステムです。その実現に取り組んでい

ます」

高橋理事長は11月（2013年）、三沢市にある自社（株）高橋の敷地内に県南初となるペレットプラントを設置、ペレットの製造を開始している。

自伐林業方式とは、山主自ら木を伐り、搬出して、販売する小規模な林業スタイル。一人でも低コストで始められることから全国的に普及しつつあるが、青森県にはそのために必要な林業技術を学べる講座が少ないため、青森バイオマスエネルギー推進協議会が6月と10月に講座を開催した。講座では、林業安全技能師範として高名な小田桐久一郎氏の指導で参加者はチェンソーによる伐木や搬出などの技術を学び、チェンソー取扱技能特別教育修了証を取得した。これで木材伐採業者「キコリ」として仕事をすることができるようになった。

ペレットは、間伐材などを細かく粉砕し、鉛筆ほどの太さに



自伐林業を推進させようと結成したウルトラ山林整備隊



キコリ講座に参加した人々

固めて短く切った、いわば小さな薪だ。自伐林業で伐り出された間伐材を同協議会が買い取り、現金に代わる「券」を発行する。その券で、地域内のスーパーなどで買い物ができるしくみにする。一人で伐倒する量は少ないものの、2人3人……と増え



ペレットプラントに設置したペレタイザー（成形機）と高橋理事長

地域の燃料は地域で製造し賄おう 目指すは『エネルギー独立共和国』

れば量も増えていく。

「小さな歯車が噛み合い連動すれば大きな力となります。自力で動くようにすることが大事で、プラントを動かす電気には

しても買うのではなく太陽光

発電と、食用油から作るBD F（バイオディーゼル油）を燃料とする発電機を使います。こうすれば原油の価格変動でペ

レットが値上がりすることもありません」

木は、かつてはエネルギーであった。明治の頃に禿山が多かったのは木を伐つて薪や炭に代えていたからである。固体に代わって扱いやすい液体の石油がエネルギーの座を占めたのに加え、安い外材に圧されて国産材の価格が暴落したことから、木は山に放置されたが、それが却つてこれまでにないほど日本全国の山々に豊饒な樹木を蓄えることになった。

「すぐ身近にエネルギーがあるのです。石油の輸入は私たちにも地域にも何ら利益をもたらしません。石油に代わって今度、ペレットが普及する番です」『エネルギー独立共和国』の実現へ向けて、すでに“歯車”が回り出している。



伐木の模範演技をする講師の小田桐久一郎氏

バイオマスエネルギーで 美しい青森を次の世代へ、**高**い志で**橋**わたし

特定非営利活動法人

青森バイオマスエネルギー推進協議会

〒033-0062 青森県三沢市新町2-31-2171 電話:0176-53-4175

<http://www.bioene.jp>

青森バイオマスエネルギー

検索

e・wood+ 株式会社 今井産業

近い将来、さまざまな方面で“木のダンボール”が売り出される日がくるかもしれない。紙ではなく、間伐材などを原料に波型に連続して曲げ加工を施した新合板の『e・wood+』（イーウッドプラス）。軽くて丈夫なため建材や内装材へ活



薄い木目がそのまま模様として生かせるため一味違った照明器具を生む

用でき、形状の面白さから照明器具や家具などの工芸品の試作も進んでいる。いったん流通し始めれば、ホームセンターでダンボールが売られているように、木のダンボールも商品として並べられるようになるはずだ。

『e・wood+』の生みの親は、(株)今井産業(平川市)の今井公文社社長。「紙」のダンボールを、「木」で作れるようになれば、山に放置されているスギの間伐材や、リンゴの剪定枝などを利用できる——そこから開発に取り組んだ。その背景には、

地元工務店の強化を図るため今井産業が呼びかけて組織した『e住まいネットワーク21』の会員200社に対し、オリジナル商品を提供していかうという先を見越した「戦略」があった。薄板を煮沸して作る曲げわっぱをヒントに試行錯誤、ついに製造機械1号から厚さ0・5ミリの薄板が高さ6・5ミリの波型になって押し出されてくるまでに4年かかっている。

スギなど地元の資源を活用した新商品開発の事業が、国の「地域産業資源活用事業計画認定」を受けたのは7月(2013年)のこと。この地域産業資源活用事業計画とは、中小企業が各地域の強みである農林水産物など地域資源を活用して新商品の開発等の事業を行うもので、東北経済産業局が

事業計画認定を行い、認定書を交付する。つまり、今井社長が生み出した『e・wood+』が、期待される新素材として国に認定されたのである。



『e・wood+』で試作された鍋敷き(左)とコースター

「地域産業資源活用事業計画」に認定 商標『e・wood+』でブランド化へ



軽くて丈夫な“木のダンボール”はさまざまな用途が期待される



『e.wood+』を手に熱い思いを語る今井社長

県庁の会議室で行われた授与式で今井社長は、「木材でできていたため廃棄処理に手間がかからず、再生利用が容易

で、環境に優しい新素材です。プラスチック系や発泡スチロール系、紙質系に代わって多方面で活用が期待できると考えます」と述べた。

今井社長は、波型ボードを『e.wood+』（イーウッドプラス）の商標で販売し、ロゴ使用などを契約で義務付け、ブランド化を図る計画で、企画会社、デザイナー、製造会社、販売会社のコラボレーションを図るプラットフォームを整備していく

という。

事業認定に対し県商工労働部次長が、「地元のを活用して新商品を開発する今井社長という人物こそが青森県の『地域資源です』と称賛した。

今井社長は6月、東京ビッグサイトで開かれた「第8回国際雑貨EXPO」に、『e.wood+』を木製エコ素材で作られた雑貨類として出品。さらに11月には「インテリア・ライフスタイル展」に参加し、一流企業に交って素材の魅力を存分に示した。

昨年（2012年）は同じ東京ビッグサイトの『産業交流展2012』にも出品している。

「多くの人に知ってもらうにはなんととっても人口の多い東京です。こちらが考えつきもしないようなアイデアが寄せられますよ。ミツバチの巣箱にしたとか、軽いから棺桶に最適だとか……。」と笑顔の今井社長。今後も意欲的に啓発活動を展開していく考えだ。



自然のぬくもり暮らしの中に

株式会社 今井産業

本

社 ● 平川市新館藤山16-1

TEL.0172-44-2145 FAX.0172-44-2568

<http://www.nijiironomori.net>

弘前常設展示場 ● 弘前市泉野3丁目16-4

TEL.0172-55-0440 FAX.0172-55-0441

E-mail : llp-genki@clear.ocn.ne.jp

青森常設展示場 ● 青森市富田4丁目12-22

TEL.017-752-0981



Wood rack
ウッドラック



函館の北側に隣接する北海道茅部郡森町。残雪の駒ヶ岳を間近に望む山麓に建つ民家の三角屋根の上に、何人もの男たちの姿があつた。一歩誤れば転

落の危険がある45度の屋根。急勾配なその斜面から、50センチ角(外径)の四角い煙突が突き出ている。命綱を身につけ、ヘル



急勾配屋根の民家の煙突を掃除する“北の煙突掃除人”たち

メット姿で煙突を取り巻いている男たちは、この家のペチカの煙突を掃除する“北の煙突掃除人”たちだ。

その中に、青森市の薪ストーブ販売店「ウッドラック」の相馬壮代表の姿が見えた。前日の明け方に、青森港からフェリーでスタッフの石村真弓さんらとともに函館に渡っていた。厳寒地・

北海道における煙突掃除の実習や勉強会を通じて、より安全で快適な薪ストーブライフの実現を目指そうと2日間開かれる『北の煙突掃除人集会』に参加したのだ。煙突掃除だけでなく、薪ストーブの内部をメンテナンスする人たちなど全国から薪ストーブショップの有志16人が参加した。

今回の煙突掃除人集会は2

回目。第1回目は2012年に岩手と青森で開かれた。その年には、青森県下北半島の大間原発敷地内にある「あさこはうす」(ログハウス)に薪ストーブを取り付けるボランティア活動も行った。このときも各地から“熱き有志”たちが参集している。交流の輪が広がり出したきつかけは、2011年の東日本大震災。津波で流された高田松原の7万本の赤松を薪にして販売し、収益金を復興支援に役立ててもらおうと集まった。

その出会いで意気投合し、今回の『北の煙突人掃除人集会』へとつながってきている。

煙突掃除を行った三角屋根の家の薪ストーブは、函館のファイヤピット(大石守さん)が取り付けたもの。ペチカの燃料は、もともとは石炭だったが、良質の石炭が入手しづらくなつたため10年前に薪ストーブに交換し、煙突はペチカの煙道に連結させた。今回の煙突掃除では、横に曲がる煙道と接続さ



煙突掃除人集会の参加者たちと相馬代表(前列右から4人目)

せたストーブの燃焼具合や、ススの付き方などを検証した。

次に大沼公園の大沼のほとりに建つ住宅へ移動、デンマーク製小型薪ストーブから立ち上がる四角い蓄熱式煙突(中を通る土管の周囲をコンクリートで固めたもの)の掃除と、ストーブのメンテナンスも行った。

午後からは勉強会。ウッドラックの相馬代表が、薪ストーブの設置にともなう「安全離隔

北海道で「北の煙突掃除人」集会 薪ストーブ屋“熱き有志”が参集

距離」について課題点を提示した。ストーブ本体と可燃壁との離隔距離(離さなければならぬ距離)が定められているが、

メーカーがカタログに示している基準と、行政で決めた告示とがある。どちらに従うべきか。「皆が集まったこういう機会に、

皆それぞれが業務で直面している課題などを発表して意見交換すれば、意識の向上につながります」と話す相馬代表。「勉強ばかりでなく夜の一杯も楽しみで、一晩じゅう語り明かしても語り尽きない連中です」と仲間たちに信頼を寄せた。

薪ストーブは単なる暖房器具ではありません。家族や仲間の団欒の場になったり、料理をつくるキッチンにもなります。揺らめく炎を眺めながら魅力語り合いませんか。当店には薪ストーブのほかベレットストーブも展示しています。



勉強会で講義する相馬代表(右)



薪ストーブと木の雑貨
Wood rack
ウッドラック

青森市自由ヶ丘1丁目2-13
TEL.017-752-0133 FAX.017-752-0134
E-mail : info@woodrack.jp



ウッドラック
オーナーズクラブマーク



